

YAMASHINA SEIKI co., Ltd.

山科精器新社屋竣工のご案内

山科精器株式会社
本社オフィス改築工事
2023年8月1日～2025年5月1日

山科精器株式会社
代表取締役社長
常務取締役
執行役員 パートナーソリューション部長
執行役員 コーポレートデザイン部長

大日陽一郎
保坂 誠
石嶋美朗
古野智子

株式会社澤村
代表取締役
建設プロデューサー
設計

施工管理 1期工事:
2期工事:
空間コーディネーター

澤村幸一郎
宮前聡志
徳永康治
奥嶋亮平・木村直輝・大竹宏樹・関 純太
奥嶋亮平・関純太・佐野奨真
中島浩子

Build by **SAWAMURA**



1939年の創業以来培ってきた精密機器の開発・製造の技術力を礎に、

お客様の想いをカタチにしてきた山科精器。

その新たな歩みの拠点が完成しました。

コンセプトは、「人と人、人と空間の結合」。

部署や職種の垣根を超え、つながり合える場所にしたい。

その実現に向けて、若手社員を中心に意見を重ねました。

2024年に竣工した新社屋では、

業務動線の効率化やコミュニケーションの活性化、

そして心地良い環境を追求。

100人が集う3階吹抜けの大階段をはじめ、

仕切りを設けず程よい距離感を保てるレイアウトなど、

さまざまな創意工夫が息づく空間へ。

今では自然と人が集まり、言葉を交わすことで

新たなアイデアが生まれ、

さらなるイノベーションへと広がりはじめています。

「つながる」ことで、働き方が変わる。

可能性を拓く新社屋。



社内イベントや外部の方を招いたセミナーなど
特別な時に活用できる、100人収容可能な大階段



縦のつながりを意識した、
新社屋中央の大きな吹き抜け



壁や区切りをなくし、
フロア全体が見渡せる



ドアを開けても閉塞感を感じない
ミーティングスペース



社屋のデザインを再現したキッチンには、
社員同士の交流が深まる場



ロゴの影が壁を彩り、
時の移ろいを感じさせる



Project Interview

member



執行役員
パートナーソリューション部長
石嶋美朗



執行役員
コーポレートデザイン部長
古野智子

どこにいても人の気配を感じられる。 つながり合えるオフィスから生まれる、新たなイノベーション。

社員同士のつながりを深め、新たな発想を生み出す環境づくりを目指した新社屋。
壁や仕切りを取り払ったオープンなデザインで、コミュニケーションを促進。
働きやすさと生産性が自然と高まる、新たなオフィスが完成しました。

部署間の境界が明確で 連携が取りづらかった旧社屋

滋賀県栗東市に本社を構える山科精器は、1939年の創業以来、各種専用工作機械、熱交換器、注油器の開発・製造に注力してきました。営業、設計開発、調達、製造、品質管理、保守に至るまで社内一貫生産体制の開発・製造にこだわり、2009年にはこれまでの技術を応用して医療機器分野に参入。中でも熱交換器、注油器は、国内ではトップシェアを獲得しています。

SAWAMURAは以前にも同社の工場建設を手がけた経験があり、その際の管理能力や施工品質の高さが評価され、社屋改修プロジェクトのパートナー候補に挙がりました。当初は改修工事のみのご相談でしたが、建設から30年以上経過している旧社屋は建物の老朽化が進むなど様々な問題が山積。これを積み残すよりはと新築建てで替え工事を提案しました。

旧社屋は部署ごとにスペースが細かく区切られており、空間もつい閉鎖的に。結果、社員同士のコミュニケーションが不足し、これが大きな課題となって



いました。プロジェクトメンバーの一人であるコーポレートデザイン部 部長の古野さんは、「部署間の境界が明確で、それぞれのチーム意識が強まる反面、他部署を訪れて気軽に相談を持ちかけたり、部署や職種を超えたコミュニケーションを取ることが難しい状況にありました」と振り返ります。これでは、部署同士で手を取り合い、今までにない新しい発想を生み出すのは難しいと感じていたそうです。

工事期間中の社員の動きも考慮した 運用提案が決め手のひとつに

SAWAMURAを選んでいただく決め手となったのは、工事期間中の社員の業務に配慮した運用でした。社屋の建て替えの場合、敷地内にプレハブを仮設し、完成するまではそこで業務を行うのが一般的。しかしこの期間を持つことは、工期の長さによる業務への悪影響やコスト面からみて、同社にとって非常に大きな懸念材料となっていました。

SAWAMURAは、工期を二段階に分けるプランを提案します。まずメイン



となる建物を解体し、社屋を新築。その間、社員は隣接する食堂やテレワークで通常業務を行い、新社屋が完成したのちに食堂の改修工事を進めるというアイデアです。さらに、固定席を設けずそのつど空いているスペースを選んで仕事をする“フリーアドレス”を工事期間中から徐々に導入。新社屋に移ってからのテーマだった、「各自が必要に応じて自由に場所を選んで働く環境」へと、スムーズに移行することができました。「建物だけにフォーカスするのではなく、工事中でも業務を円滑に進めることができるよう、働き方にまで寄り添った提案をしていただきました」。

自然なコミュニケーションが生まれる環境づくり

3階建ての新社屋の中央に位置するのは100人の収容が可能な大階段。新社屋で最も特徴的な場所です。3階まで吹き抜けになった開放的な空間は、日常的には多くの人が行き交う動線であり、仕事の気分転換ができる場に。社内イベントや外部の方を招いたセミナーなど特別な時には、人が集まる場となる効率的なスペースです。大階段の上部には、窓ガラスに向かって一面にワークスペースを設置。景色を眺めながら



集中して仕事ができると、社員にも評判です。

1階に営業部門と管理部門、2階に設計部門、3階には大人数で使える会議室とフリースペース。屋上には自由に出入りの出来るスペースも設置し、豊かな自然を肌で感じることでできる社員の憩いの場となっています。これまでと同様に各階で部署が分かれてはいるものの、壁や仕切りを一切なくし、どこにいても適切な距離を設けつつ人の気配を感じ合えるような空間を目指しました。また、各階にオープンなキッチンスペースを設け、社員同士が自然に集まり新しいアイデアやコミュニケーションが生まれる環境をつくりました。

若手社員をプロジェクトメンバーに抜擢 新社屋になって感じる社員の変化

同社の将来を担う若い社員たちの意見を取り入れたオフィスにしたいという思いから、各部署から比較的若い年齢層の社員をプロジェクトメンバーに選出。全社員へのアンケートから導き出した「集中・コミュニケーション・リラックスの3つを自由に選択できること」、「部門を超えた新たなつながりが生まれる場所であること」をテーマにプロジェクトは進みました。

社屋建替え全体を担当した部長の石嶋さんは「新社屋をきっかけにこれまでの体制を一新したかった。山科精器は、社員自らやりたいことを提案し実行する提案型の社内風土を活かし、今後どんどん活躍してくれる若い社員たちにとって働きやすいオフィスにしたいという思いが強くなりました」と話します。完成したばかりの新社屋はまだまだ慣れないことも多いそうですが、「自分たちの空間をおしゃれな状態に保ちたい」という思いから社員の整理整頓に対する意識も向上し、オフィス環境の美化にもつながっているそう。

第二期工事を経て完成した新社屋。外構スペースや渡り廊下は、社員だけでなく地域住民にも開かれた環境としてオフィスの役割を広げていく予定です。新しくなったオフィスでの働き方やコミュニケーションの変化により、新たなイノベーションが生まれることを期待されています。